

夢

-Live Your Dreams-

2011年が始まります。夢に向かって、目標を抱いて新年に臨む人も多いはず。夢がある人は目標があります。目標がある人は努力します。努力する人は輝いています。松前町で今、夢を追って輝いている人『夢追人』を紹介します。皆さんが、夢を抱き、努力し、輝くきっかけとなることを願って。

夢を語る

白石勝也町長と早瀬武臣議長 トップ二人が夢と2011年の決意を語る



夢追人

1

夢に挑む

仲島慎太君
体力気力共に自らコントロールし
頂点を目指す



夢追人

2

夢をつかむ

岡田一騎君
夢は日本代表
チャンスは努力でものにする



夢追人

3

夢をつなぐ

窪田早紀さん 渡部聡美さん 林聡子さん
藤本知咲さん 山崎紀弥さん 神野あかりさん

強い心と固い絆で
夢を受け継ぐ



夢追人

4

夢を叶える

八木徹雄さん
世界に歌声を
夢は無限に広がる



夢追人

5

夢を極める

澤井定子さん 門脇圭子さん
歌は心の支え
夢は心の糧となる

白石勝也町長と早瀬武臣議長

トップ二人が夢と2011年の決意を語る

松前町の皆様、明けましておめでとございます。私は、本年は元気に新しい年を迎えました。本年は年男ですので心はうさぎの様に純白に澄み切っています。

本年は、町長として三期目の最後の一年であります。皆様の負託、要望にお応えできるよう、精一杯町政の推進に取り組み参ります。そして、然るべき時期に次に向けてどうするかを判断したいと思っています。

昨年は、日本にとって暗いニュースの多い年でしたが、うれしかったことは、二人の日本人化学者がノーベル賞を授賞されたことでした。スウェーデンで行われた授賞式での、笑顔やスピーチ：日本人を誇らしく思っただけです。

一方、世界でも北朝鮮の韓国への砲撃など、争いがあつとを絶ちませんでした。しかし、南米チリで8月に起きた炭鉱事故で、地下700mに取り残された、33人の鉱員が69日後に全員無事救出され、しかも、救助隊が助け出そうとした時、全員が「自分は最後までいいから」と順番を譲り合ったというニュースは、世界中の人々に感動を与えました。

私は町長に就任した翌年度に、第3次総合計画をスタート

『兎追いし かの山 小鮎釣りし かの川』：今はないかも知れない。しかし、私たちはいつまでもこの歌を歌い続けてい

明けておめでとございます。輝かしい希望に満ちた新春を健やかに迎えたいとお喜び申し上げます。

さて、世界的および国内における長引く経済不況が、地方経済を直撃し住民生活にも大きな不安と閉塞感を与えております。本町でも地域経済対策に全力を挙げているところであります。

しかし、雇用情勢は依然として厳しい局面が続いており、個人消費の冷え込みなども懸念されるなど予断を許さない状況にあり、地域経済を活性化させ、景気や雇用状況を好転させていくためには、切れ目のない景気対策を推進していく必要があります。

こうした中、地方向けの交付金等は、現下の経済・雇用情勢への対応はもとより、学校の耐震化など、国民の生命や生活、教育を守る施策推進のための貴重な財源です。深刻な景気後退

させました。人とみどりが増え、くぬくもりの町をスローガンに、環境や教育文化、保健福祉などの基本施策を掲げて、おのの分野で実現に努めて参りました。しかし、途中市町村合併という問題が起こり、その上少子高齢化社会が予想を超えるスピードで進み、財政見通しが全く立たない中、三位一体の改革によって地方交付税が大幅に減らされました。このため、松前町の財政は非常に厳しくなり、文字通り身を切る思いで行財政改革を実行してきました。なんとか最悪の危機は脱しましたが、前途は容易ではありません。

そこで昨年、次の10年を見通した第4次総合計画をスタートさせました。計画の底流にあるのは、住民の元氣な笑顔、つまり「笑顔あふれるライフタウンまさき」をみんなで目指そうということ。自立、共生、飛躍を理念に掲げ、本年から一つ一つの具体的な施策を実施して参りたいと思っております。

筒井一徳丸線は間もなく完成し、これにより、町の中心部の交通渋滞が緩和されることを期待しています。大谷川沿いの南黒田工業団地は未だ実現をみていませんが、伊予市の協力を得ながら、地域にやさしい新しい

ます。それはやはり、ふるさとへの思いがあるからだと思えます。そのふるさと松前町のため、今年も力一杯頑張ります。

が続いているなか、今後の地域の実情に合わせたさらなる景気対策に万全を期すよう、議会といたしまして国に対して強く要望していきたいと考えております。

議員に就任した時より抱えておりました「心豊かな、元氣な町に」という夢を実現するべく議会・行政と共に鋭意努力をしております。結果、商工会の尽力により昨年10月に中小企業活力向上事業の核となる交流拠点施設「ふれあい館」がオープンされました。

今後は、各事業に取り組みられた地域の方の交流の場としての「ふれあい館」を活用されるようですが、商店街の活性化とあわせて地域の活性化を図るとともに、人の輪が大きく育っていくことと期待いたしております。

これからも未来に夢と希望の持てる町づくりのため、行政需要に計画的に対応し、また施策には積極的に取り組み、町の

企業立地を進めたいと思っております。いつ起きるか分からない災害に備えて、学校の耐震化を着実に進めるとともに、北黒田海岸の改修工事も始まります。6年後のえひめ国体に向けて、ホッケー場の整備、JRの貨物車両基地の建設に向けた作業も本格化して参ります。

一方、これからの生活環境は、人間だけを中心に考えるのではなく、エコやバイオといった自然や地球にやさしいものでなくてはなりません。

山も川も海も私たちの生活に欠かせないものです。ごみのリサイクル化をさらに進め、いつまでも人間と自然が共生できるやさしい環境をみんなで作っていかねばなりません。今も日本人が一番多く口ずさむ童謡は「故郷」です。

皆様にとつても素晴らしい出会いや思い出が多い年になりますようお祈り申し上げます。

松前町長 白石 勝也

発展と町民の幸せのため、ご期待に添う活動をしてまいります。何とぞ皆様におかれましては、今後とも変わらぬ御指導と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

年頭にあたり、本年が皆様にとりまして最良の年でありますよう祈念いたしまして、新年のごあいさついたします。

松前町議会議長 早瀬 武臣



『自立』『共生』『飛躍』を掲げ 本年から一つ一つ 具体的な施策を実施

行政需要に 計画的に対応 施策には 積極的に取り組む





一度やると決めたら やめたくない

「パシッ、パシッ、ドスッ、パシ」
松山工業高の第2体育館からリズミカルに響くスパークリングの音。ボクシング部の仲島慎太君は頂点を目指して挑み続けています。

慎太君がボクシングを始めたのは高校から。中学まではバスケットをしていましたが、同部のOBに声をかけられ、入部を決意しました。

「拳闘」とも呼ばれる格闘スポーツのボクシング。「最初は体力も技術もなくついていけない

かった」と慎太君は振り返ります。しかも試合に出られるのは1年間練習を積んでから。結果を出す機会のないまま、ハードな練習が続ききました。それでも「やめようと思ったことは一度もない。1度やると決めたらやめたくない」ときっぱり。

2年生になり、初の公式戦となった県総体地区予選ではミドル級に出場。デビュー戦は惜敗しましたが、続く県予選では見事優勝。インターハイ出場を決めました。インターハイでは、朴選手(東京朝鮮)に7-1で悔しい判定負けでしたが「全国舞台に緊張したけど勉強になっ

た。もつとガードを上げる。体力をつける」と決意。今まで以上に練習に打ち込みました。

厳しい練習で磨いたセンスは徐々に開花。リングに上がるたびに結果を出すようになりました。6月に徳島県で行われた四国選手権大会でも見事優勝。こうした活躍と将来性が期待され、国体県代表に選ばれました。

8月21、22の両日、高知県で行われた国体四国大会では、先陣の県勢が僅差で敗退していく中、「仲間の分も勝たなければ」と闘志を燃やす慎太君。臨んだ少年の部決勝では、1ラウンド目から左ジャブ、ワン・ツ、

1 体力気力共に自らコントロールし 頂点を目指す

夢追人

夢に挑む

仲島慎太君

ボディーブローとコンビネーションで、ただひたすらに手を出し続けました。「俺が勝つ！俺が勝つ！」と。両者引くことなく繰り出されるパンチ。3ラウンド目になると互いにスタミナ切れに。それでも「倒れるまで打ってやる」意識がもうろうとし始める中、慎太君はこの気持ちだけで闘い続けました。

そこに試合終了のゴング。グローブを外し判定を待ちます。結果、レフリーが手を挙げたのは慎太君。気持ちで負けない慎太君は、2度目の四国チャンピオンになりました。

初の公式戦で負けて以来、四国の大会では負け知らずです。

高いモチベーションで リングに上がる

入学時は86キロあった体重。ミドル級に出場するため10キロ以上減量しました。さらに、今秋の新人戦からは慎太君の小柄な体格を生かせるよう、ライトウェルター級に階級を落としました。ミドル級の体重規定が69キロ、74キロなのに対し、ライトウェルター級は60キロ、64キロ。「食事と水分量を減らし、走り込みをして試合前は64キロまで体重を落とします」と減量中のつらさを話します。その分、

勝ったときのうれしさは最高だと言います。新人戦、ライトウェルター級でも優勝し、二階級制覇を果たしました。

藤崎昭典監督は「慎太は自分からどんな攻めるファイタータイプ。負けん気が強い。何より試合に対する気持ちの持っていていき方が上手い。体力気力共に自らコントロールし、高いモチベーションでリングに上がるることができる」と話します。

1月には四国大会があり、勝てば3月の全国選抜に出場できます。「全国の舞台に出て、上のレベルを再認識してほしい。そして他のお手本となつてほしい」と期待を込める藤崎監督。慎太君は「勝つために少ない手数を増やしていきたい」と強気。「まずは1月の四国予選で優勝し、全国に行きたい。そして、2度目のインターハイ、国体出場を狙います」と夢を語りました。目の前と未来の目標を見据え、真つすぐに突き進んでいます。



なかじま・しんた
平成5年生まれ。高校からボクシングを始める。階級は8月の国体時はミドル級に出場し、今はライトウェルター級で登録。自分から攻めるファイタータイプ。筒井在住。松山工業高2年

NAKAJIMA SHINTA



夢追人

2

夢をつかむ

夢は日本代表 チャンスは努力でもものにする

岡田一騎君

夢へと近づく
一歩を踏み出す

クラブと部活の垣根を越えて、アンダー15の真の日本一を決める舞台、高円宮杯。四国予選決勝は11月14日、徳島県で行われ、愛媛FCジュニアユースが徳島ヴォルティスジュニアユースを1対0で下し、全国への切符を手に入れた。

その決勝ゴールをアシストしたのが北伊予中3年生の岡田一騎君です。

「小学2年生の時、テレビで韓国ワールドカップを見て、僕もサッカーをやりたいって思ったんです」

一騎君は3年生から北伊予ジュニアフットボールクラブに入団。サッカーを知れば知るほどますます夢中になりました。夢は広がるばかりです。「もっと上手くなりたい、プロになりたいって思うようになったんです。中学1年生の春、愛媛FCジュニアユースのセレクションを受験しました。ジュニアユースは、レベルが高かったし、県外チームとの試合も多くて、自分を向上させられると思ったからです」

合格率低い難関のセレク

ションを見事突破し、夢へと近づく一歩を踏み出した一騎君。それからサッカー漬けの毎日が始まりました。

才能より努力
常に全力で練習

週5日の練習。場所は愛媛県下津寺。18時45分からの練習に遅れないためには、学校が終わるとすぐに帰宅し、着替え、電車に乗り込まなくてはなりません。厳しい練習をこなし、帰宅するのは22時。夕食、入浴、宿題を終えると、就寝時刻は夜の1時になることも。

母の美紀さんは、「箸を持ったまま、本を持ったまま寝ている姿を見ると、もう心配で。それでも、弱音を吐かずにサッカーを続け、何にでも一生懸命な一騎君を見ると胸がいっぱいになります。たくさん勇気をもらいます」と話します。

自宅でも暇さえあれば近所でボールを蹴ったり、ランニングをしたり。とにかく努力することを欠かさない一騎君。美紀さんは「一騎はもともとサッカーの才能があったわけではありません。努力でやってきたんです」

と言いきります。

常に一生懸命。全力で取り組む一騎君。夢をつかむため、「人より努力すること」という強い信念がありました。

篠崎秀陽監督は「彼の良さは一つのこと。一生懸命に臨む姿勢。持ち味は守備も攻撃もできる豊富な運動量」と語ります。

その豊富な運動量を生かし、高円宮杯四国予選では全試合にフル出場。チームで不動の右サイドバックとして活躍しました。しかし「優勝はできたけど、個人としては力不足。相手にドリブルで抜かれ、ミスもしたから」と悔しさをにじませます。「常に向上心を持つ」「考えながらプレーする」「これも一騎君の強い信念です。その信念こそが結果を出してきました」

10月に行われた愛媛FCユースのセレクションにも見事合格。来春からはユースへの昇格が決まり、また一つチャンスをつかみました。「レベルが高いユースでも活躍したい。勉強もして、大学に行き、プロを目指したい」と目標を掲げます。

「夢は日本代表」
瞳を輝かせて力強く語る一騎君。努力を続け、一つずつ目標をクリアしながら夢をつかみます。



おかだ・かずき
平成7年生まれ。愛媛FCジュニアユース所属。守備も攻撃もできる豊富な運動量を持ち味。サイドバック。東古泉在住。北伊予中3年

OKADA KAZUKI

本町出身の南高生
夢の大舞台「国体」で活躍

「第65回国民体育大会」ホッケー競技は9月30日から10月4日までの5日間、千葉県いすみ市大原グラウンド陸上競技場などで開かれ、少女女子の愛媛選抜チームは5位になりました。同チームには、本町出身で松山南高3年の林聡子さん、藤本知咲さん、窪田早紀さん、渡部聡美さん、2年の山崎紀弥さんが出場。それぞれがチームの主力として活躍しました。

選抜チームをキャプテンとしてまとめた3年生の窪田早紀さんは「仲間や監督、自分を信じて最後まで努力を続けた結果が出て本当にうれしかった」と喜びを語ります。

渡部聡美さんは「全国大会で勝つ喜びを感じました。そしてそれには多くの努力が必要だと思いました」と、林聡子さんは「試合が終わるまであきらめないこと、チームを信じて楽しくプレーすることが勝利につながりました。全国の強いチームと戦えて楽しかったです」と、藤本知咲さんは「全国大会に出場するチームに、高校から始めた私たちでも通用することがわかりました。小学生から始めればやればもっと上のレベルだって

夢じゃないと思いました」と振り返ります。

全国で活躍した彼女たちのホッケー。その強さは、松山南高ホッケー部で培われました。

選抜チームの監督でもあった南高ホッケー部顧問の田中崇士教諭は「バカが付くほど一生懸命なところが彼女たちの良さ。声は出るし、明るい。練習の雰囲気も良かった。やらされるのではなく、みんな本当にホッケーが好きで、自ら練習していました。それが結果につながりました」ときつぱり。もう一つ、彼女たちの強さの秘けつは最後まであきらめないところ。とにかく追い込まれてからが強く、国体の1回戦、残り5分で点を取って1-0で勝ちました。インターハイでも、1-0で負けたところを残り3分で追い付いて逆転勝利。

「そんな彼女たちの頑張りは、声の出し方、気持ちの盛り上げ方、練習の雰囲気や取り組む姿勢も全ての面でしっかりと後輩たちに受け継がれています」と田中監督は目を細めます。

2年生の山崎紀弥さんは「残り5分で点をとる先輩たちを見て、最後まであきらめない大切さを学びました」と、1年生の神野あかりさんは「初めての公式戦では先輩の気力があふれるプ

強い心と固い絆で 夢を受け継ぐ

3 夢を追う人 夢をつなぐ

窪田早紀さん 藤本知咲さん
渡部聡美さん 山崎紀弥さん
林聡子さん 神野あかりさん

レーや、引退した3年生の先輩の迫力ある応援に励まされながら走り回ることができました。先輩を見習い、チームで自分のすべきことが見極められる選手になりたいです」と語ります。

「妥協しない」 受け継がれていく信念

上手くなるために必要なことをそれぞれに尋ねると「ひたむきな姿勢」「感謝の心」「自分だけが上手くなるのではなくライバルを育てる」「負けず嫌いであること」「チャレンジ精神」など、十人十色の意見。そんな中、共通した言葉がありました。

「妥協しない」
言葉にしなくてもチームの中で受け継がれてきた信念です。

千葉国体以外にも新潟国体、沖縄インターハイなど、全国の大舞台で活躍した彼女たち。3年生4人は引退しましたが、「松前町活性化のためにホッケーを通して力になりたい」「平成29年の愛媛国体に指導者として参加したい」など、全員がこれから大好きなホッケーに関わっていきたくと話します。

フィールドで培った強い気持ちと固い絆は、また一つ、新たな夢をつないでいきます。



たなか・たかし
昭50年生まれ。
平成20年より南高女子ホッケー部監督。大溝在住

TANAKA TAKASHI

わたなべ・さとみ
平成4年生まれ。3年。MF。元副キャプテン。徳丸在住

WAKANABE SATOMI

やまざき・きや
平成5年生まれ。2年。MF。副キャプテン。徳丸在住

YAMAZAKI KIYA

じんの・あかり
平成7年生まれ。1年。MF。神崎在住

JINNO AKARI

ふじもと・ちさき
平成4年生まれ。3年。MF・DF。北黒田在住

FUJIMOTO CHISAKI

はやし・さとこ
平成4年生まれ。3年。DF。筒井在住

HAYASHI SATOKO

くぼた・さき
平成4年生まれ。3年。元キャプテン。FW・MF。神崎在住

KUBOTA SAKI

世界に歌声を 夢は無限に広がる

八木徹雄さん

夢追人 4 夢は叶う

トとして活躍しています。「音楽でアメリカに行くことは高校のときの夢でした。その意味では夢は叶ったのかもかもしれません。だけど叶ったら終わりじゃない。アメリカで活躍したい、英語を勉強したい、ヨーロッパで歌いたい。意識していれば夢は無限に広がるんです。大きすぎるもので叶わないとしても、持ち続け、そこに向かう努力をすれば、その過程でも得られる何かがあると思います。夢があるから頑張れる。どんな形であれ、夢や目標を持つことを、僕はずっと継続していきたいと思っています」

自分自身と真剣に向き合い、夢を描く。夢が叶えば、またその先に一つ夢を描く。そうして徹雄さんは前へ前へと進んでいます。

やぎ・てつお

昭和55年生まれ。大阪芸術大学音楽学科音楽工学コース卒業。同大学院芸術制作研究科修士課程(声乐)修了。現在、ボストンのロンジー音楽院オペラ科在籍



YAGI Tetsuo

ホールに響き渡る歌声で 観客を魅了

松前町第九演奏会は12月19日、松前総合文化センターで開催されました。チケットは立ち見を含め全て完売。大勢の人が開場前からロビー入口に詰めかけました。

この演奏会に昨年に引き続きソリストとして参加したのが、町内出身の八木徹雄さんです。現在、マサチューセッツ州ボストンのロンジー音楽院オペラ科に在籍。ドンナ・ロール、安田紀子の両氏に師事し、声乐の勉強を続けています。今回の演奏会のためにボストンから帰国。演奏会に華を添えました。

開演のベルの後、松前町第九合唱団に続いてステージに登場した4人のソリストに、満員の場内から一際大きな拍手が寄せられました。

ステージは、第4楽章「アレグロ・コン・フォーコ」から始まりました。バリトンの独唱の呼びかけに答えるように、徐々に独唱が加わり、独唱者と合唱の掛け合いに。続いて、それまで沈黙を守っていた打楽器が多用されるトルコ風マーチに乗って、徹雄さんのテノール独唱。

テンポ良い歌声がホールに響き渡りました。徹雄さんの歌声に続いて「第九の合唱」として有名な「喜びの歌」を200人が迫力満点の大合唱。息の合った歌声に、会場からは割れんばかりの拍手と歓声が起こりました。

終演後「大勢の観客を前に歌うのはうれしい。何より地元松前の演奏会にソリストとして参加できてよかった」と徹雄さんは喜びを語りました。

夢があるから頑張れる 夢を持ち続けていたい

徹雄さんの母代志子さんは松前町第九合唱団の指導者を務める音楽家。徹雄さんも小さい時から音楽一筋だったのかといえば「そうでもない」と。

「小さい時にピアノは少し習いましたけど、中学でサッカー部に入ってから辞めてしまいました。当時は音楽より身体を動かす方がおもしろくて」

そんな徹雄さんが音楽に目を向けるようになったのは高校3年生のとき。

「将来自分に何ができるか真剣に考えたとき、ピンときたの

が、昔習っていた音楽だったんです。根拠はなかったのですが、これならできると思ったんです。映画音楽の作曲がしたかった。アメリカで活躍したいと思った。それで、高3の夏からピアノを始めました。周りは驚いていましたけど」と笑います。浪人も考えたという徹雄さんでしたが「やりたいと思ったとかがやるとき」だという強い気持ちで、長年のブランクを取り戻そうと、必死になって勉強しました。

夢は叶い、大阪芸術大学に見事合格。大学で、映画音楽はもとより、クラシック音楽を二から勉強し直し、その過程で今につながる「歌」に出会いました。

「校内でポスターを見たんです。力強く歌う人が写っているポスター。結果的に僕が歌を習う先生がこの人でした」

以来、その先生に就き、学びながらオペラの魅力にはまっていった徹雄さん。オペラを通じ、さまざまな体験や出会いを経て、アメリカへの留学を考えるように。そして、平成20年、アメリカへ留学。現在、コーラス・ボストン芸術監督・指揮者として、また、ウォータータウン・コミュニティチャーチ聖歌隊所属ソリス





歌は心の支え
夢は心の糧となる
澤井定子さん 門脇圭子さん

夢追人 **5**
夢を極める

子規全国短歌大会で 親子そろって入選

子規の精神を受け継ぎ、俳句と短歌の普及を目的に開催される「子規顕彰全国短歌大会」は10月14日、松山市の子規記念博物館で開かれました。全国の愛好家から多数の歌が寄せられる同大会で、澤井定子さんと二女の門脇圭子さんは親子そろって入選しました。

定子さんの入選作は「日捲りをめくりて半年はやも過ぎ残りの厚み手に確かむる」。

「歌評では、病気を患う家族を思って詠んだ歌とも、看護師などの介護者が詠んだ歌ともとれる、いろんな場面が目に見え、心の込もった歌だと言っていたいただきました。実際は母が自身の事を歌っています。高齢となり、目も耳も悪くなってきた母がカレンダーをめくりながら感じて

いた思いを詠んだ歌。母はこんなふうに日常の中から歌を詠みます」と圭子さん。

圭子さんの入選作は「目の前の渦が渦巻く瀬戸のうみ轟き止まぬ春の大潮」。瀬戸の渦潮体験に行ったとき、渦がだんだん大きくなる様子を見て詠んだ歌です。

定子さんは心を詠む「心情詠」を、一方の圭子さんは、見て感じて詠む「写生詠」を好んでいます。

定子さんが短歌を始めたのは昭和53年。三好けい子さん（現松山歌人クラブ顧問）と出会ったことがきっかけでした。「自己流でやっていたけど本格的にやってみたくなって」と歌会に参加するようになりました。自宅で歌会を設けるほど没頭し、平成2年には自身の生涯をたどった歌集「重信川」を出版するまでに。

圭子さんが短歌を始めたのはその歌集がきっかけでした。

「母の歌集にとにかく感動したんです。姉の朋枝もそう。それから、母と姉と私の3人が短歌に夢中になりました」

子規記念全国短歌大会に親子そろって入選したのは今回が初めてではありません。平成14年には、定子さん、朋枝さん、圭子さんの3人がそろって入選。その喜びは3倍でした。

短歌と歩んできた人生 親子の夢

圭子さんは、そっと寄り添い、定子さんが詠む歌を代筆しています。

「歌に支えられて生きています」定子さんは朗らかに話し、「圭子が代筆してくれるから好きな歌が出せる。圭子がいないと

取材を終えて

夢に向かってひたむきに努力をする人がいます。夢を追いつけ、離れた地で頑張る人がいます。強い気持ちで夢に挑む人がいます。夢を追うことで自分もまわりも成長している人がいます。夢を心の糧としている人がいます。

そう、夢を持つということは、自分の未来に明るい展望を持つということなのです。

しかし、夢を夢で終わらせてしまう人はたくさんいます。夢は、ただ思い描くだけでは、そのまま夢で終わってしまうからです。そこに努力がプラスされてこそ、道は開けて来るのです。

未来はあらかじめ決められているものではありません。自分で創り上げていくものです。もしも未来がすべて決まっていたら、誰も努力をしないでしょう。だからこそ、夢を抱いた人は時間を惜しんで努力します。

努力する人は輝いています。努力する人はまわりにパワーを与えます。

さあ、新しい年がスタートします。夢を抱き、努力し、輝く1年にしましょう。

さわい・さだこ

大正2年生まれ。97歳。子規顕彰全国短歌大会入選、09年県民総合文化祭教育長賞受賞。新立在住



SAWAI SADAKO・KADOWAKI KEIKO

かどわき・けいこ

昭和16年生まれ。69歳。松前青垣会の会員で、月1回の勉強会に通う。北川原在住

家族に感謝」とほほ笑みます。定子さんの夢は100歳まで長生きすること。圭子さんの夢は定子さんといつまでも一緒に過ごすこと。

心身共に健康を目指す二人。二人そろって「歌は心の支え」と話します。夢は心の糧なのです。